

泥棒とイーダ

第07回 個性の目録化、始まる

牧田真有子

個性提供者第一号として、私はふだん利用しない系統のバスを乗り継いでその街に着いた。待ち合わせ場所は小学校の前だ。土曜日なので校門はとぎざれている。門扉は塗り替えたばかりらしくきつい水色だった。風が吹くたび黄土色の落ち葉が、乾燥した波のように中庭から打ち寄せ、門扉の下をくぐり抜けてくる。

「勝見亜季さんですよ」

張りのある声に顔を上げると、蔓がモザイク模様の眼鏡をかけた女の人が立っていた。カーキ色のコートにくしゃくしゃの短髪だ。発注者第一号の渡会さんは、離婚歴のある三十代半ばの年長メンバーである。予備校講師で、小学生の娘がいる。会合にはめったに参加しない彼女と、私は面識がなかった。

「はい、大きく丁寧に書きますが別にきれいな字ではない、勝見です」

ことわっておかねばと頭の中で準備していたメッセージが転がり出てしまい、脅すような自己紹介になった。渡会さんは大げさに笑った。私は涙をすすった。彼女の住むマンションに向って歩きながら、渡会さんは言った。

「セツちゃんの新しい試み、協力したくてね」

ええ、と頷くべきだったがくしゃみが出た。でもくしゃみくらしいの返事が、自分の実感にはふさわしいみたいだ。

電話で私に語った「メンバー目録化」構想を、セツはその後すばやく実行に移した。プログラミンングの仕事をしてきたが現在無職の女性メンバーが、彼女の右腕になった。瑠子さんといい、皆にはヨーと呼ばせて

いる。セツの物事の進め方は強引で、目の粗いものだった。会合のときに、全員参加の目録であることを前提としてあらかじめ説明し、急な展開に戸惑う会員たちの質問に応え、目立った反発がない様子を見渡すと、「じゃあ今日から始めるね」ととてもカジュアルに宣言した。作業はほとんど佐原さん宅で行われた。セツは勤め人なので毎日立ち寄るわけではないが、彼女の赤いノートパソコンは卓袱台の一角を恒常的に占めるようになった。「誰でも自由に使っていよいよ」とセツは言った。

私には必ずしも皆が彼女の考え方に賛同しているとは思えなかった。けれどプランの精度とは無関係に、彼女に備わっている徹底性のようなものが効果を発揮した。それは会員たちに曖昧な違和感を共有させるより、一つの方角へいっせいに導くことに向いている。

目立った反発は、少し遅れて室木とともにやってきた。自分自身もリストに入力することが現実味を帯びてきた段階の、臨時の会合で、彼はにわかに切り出した。

「粘り強く話し合って、全員がぜひやりたいという動機を持ってから一丸となって取り組むべきじゃないのかな。見切り発車で単独で突っ走るなんて、会の理念からいちばん遠い」

「一丸となってパソコンの前に殺到して皆でキーボードをかちやかちやるわけね？」

セツは笑って言い放った。室木は、そこでかちんと来なかった自分に一安心するような変な顔をして言った。

「もちろん、自分の特性を全体のために活かすのは意味があると思う。でもそれを強制するのは見当違いだよ。『自分らしさ』を求められ続けて疲弊する日常の束の間を、無名の存在として安らぎたいから入会した人もいるし。セツのやり口はいささか傲慢だよね」

「室木さん、私たちって、新しい『私たち』になるんでしょ？ 『未だ現れざる姿の獣』に対して、見当なんてつく？ 私は村づくりには興味ないけど、あなたがやるなら本気で手伝う。何が何だかわかんないくらいいまじりあって、それでどしどし淘汰していくしかないよ。室木さん

もそういう気構えだから、反対しなかったんだと思ってた」

布地の豊かな長いスカートの内で立て膝をして、セツは言った。三人隣で目黒さんが誰の目も見ずに言った。

「不特定多数の人たちが自分の情報を公開して互いの個性を発見しあうのはいいと思いますけど、イーダ会の会員としてすでに知り合いである人たちが目録作るのって意味があるんでしょうか」

この人は入会当時に比べて確実に進化した。あの頃と同じくらいおどおどしているわりに、どんな意見でも余さず口にする。

例によって卓袱台を壁際に寄せ、二十人程度が車座になっていた。セツは立てた膝に両掌を重ねて背すじを伸ばし、言った。

「現行のうちのサイトに参加してくれてる、準会員みたいな人たちも含またいと思ってる」

「匿名ばかりですけど」目黒さんは一瞬顔を上げた。

「素性の確かさにはムラができるね。彼らがほとんど賛同してくれなかったら、会員と準会員の割合もめちゃくちゃだし。だけどそもそも、私たちがだって本当にそんなに知ってる人同士かな？ここに集まって『イーダ』としての認識がいかに深まったか』をそれぞれの基準で報告しあっているだけでは、今開いてる以上のドアは開かないんじゃないかな」

目黒さんは小刻みに頷いていた。反論しようとする唇を半開きにしていた室木は、彼女たちの応酬に遮られて少し黙った。それから、奥の文机の方をちらっと見た。皆もつられて代表の顔を窺った。佐原さんは勢いよく睨み返した。セツだけは彼を見なかった。この二人が口をきいたためしはない。

会員たちの手前、室木は鷹揚なところを見せる方を選んだ。

彼が夜道に細長い上半身を揺らしながらピラを配ったり、会員たちと川原の清掃をしたりしている間に、セツはヨーと共に、オーブンソーイングソフトウェアを利用してパスワードの必要な会員制コミュニティ「Ida」を構築し、目録の様式を整備した。イーダ会の従来のサイトは、ヨーを中心としつつもそれこそ全員の意見を可能な限り捨てずに取り入れて作

られたものらしく、まとまりに欠けていたが、今回どさくさに紛れてしやきつとした印象になった。

ある大雨の夕方だった。佐原さんの卓袱台ちゃぶだいで英語の予習をしていた私は、差し向かいのセツからパソコン越しに手招きされ、「ちよつと打ち込んでみて」と気軽に頼まれ、設定されている項目に沿ってプロフィールを入力させられ、「亜季が目録いちばん乗りだよ」と握手を求められた。湿気ででたらめな髪型の佐原さんは社会人のふりをした電話の最中だった。

私は無言で彼女に掌てのひらを預けていた。本番なら本番ってちゃんとやってよ、私はメンバーじゃないって知ってるくせに、とセツに文句をつけようと思ったが、どうしても言えなかった。こういうことはよくあった。相手を黙らせるのが、彼女の優しさでも暴力でもなくクリアさであるために、こちらには屈辱感や淋しさを持つ権利もなかった。

「特技がドーナツ作り、スポーツがジョギングってのは知ってたけど、亜季はロック音楽が好きなんだね」とセツに言われ、自分が埋めたばかりのリストにのろのろと目を遣った。「好きな音楽」欄だけではない。「愛読書」にも「座右の銘」にも、趣味人の父が凝りに凝ったものの面影がひそんでいる。職歴も学歴も資格も空欄の私の画面は、趣味の世襲だけばしつと浮かび上がらせて、そっけなく発光していた。私は言った。「こんなのは、動かせない事実であると同時にものすごく解像度の粗い自分でしかない、という訴えはどの欄に入力すればいいの」

「そうだ、いちばん肝心なやつ忘れてた。自己紹介欄抜かしてた」セツはパツと手を放し、私はまるで自分の掌を落としそうになった。激しい雨音と、それに混じり合わない簡潔な雨垂れの音との隙間に意識を置いていると、セツが再び手招きした。場所を交代してくれたヨーの体温が残っている座布団に私は座った。

『昔命を救われたことがある。芸術と縁がない。数学を憎んでいる。髪だけむやみに褒められる。休日は自転車で遠出し、見知らぬ公園でマンガを読む。魔法瓶で紅茶持参。犬に好かれやすい。猫に引つ搔かれやす

い。動物の飼育経験なし。視力良。アレルギーなし。風の強い日を好む』

そこまで打ち込んで、私は一挙に消し、入力しなおした。

『自己紹介を書く、自分自身との差が際立ってきて、自分の中身が薄暗くて生温かくて刻々と形を変える迷路みたいに、思えてくる』

「さっきの方に戻せば？」と背後から眺めていたヨーが苦笑まじりに言った。セツは「いや、そのままでもいい」と言っ、ふしぎなほど真面目な顔をこちらに向けた。

「君は優秀なパイロットだね」

家に帰って辞書を引くまで、「試験的」という意味があるのを知らなかった私は、鱗を光らせながら黒い雨雲の上を渡るイーダと小さな飛行機を想像していた。

結局、佐原さんの家に集まったり会員の誰かと個人的つながりのある、顔の見えるメンバーは全員が登録し、サイトを訪れてハンドルネームで投稿したり交流したりするだけだった潜在的なメンバーは半数ほどが呼応した。加えて、今までは匿名ですら書き込みをしてこなかったがこれを機にメンバーになることを決めた、という一派も現れた。「イーダ」の実現という目的を共有することがコミュニティの前提となっている分、他の条件は緩やかにすべきだというセツの意向で、実名でも匿名でも登録できる仕様となった。

そして特技欄でも趣味欄でもなく、そんな設定があることに内心呆れていた、「どうしてだかやってしまうこと」欄に目をつけて私にコンタクトしてきたのが、渡会さんだった。あの大雨の夕方、「こんなの自分ではよくわかんない」と言ってパスしようとした私は、セツの入れ知恵で「大きくて目立つ字を書く」と入力したのだ。

オイルヒーターの電源を入れ、コートを脱ぎながら渡会さんは言った。「どうも昔から小さい字で書くのがクセなの。しかも悪筆でね。いくら手作り感出すためにパソコンを使わないといっても、読めなきや意味が

ない。代わりに書いてもらえると助かります」

イーダ会には一つの持ち物を長く使う人が多い。私は佐原さんのアパートでメンバーたちの冬服に莫大な毛玉を見てきたわけだが、渡会さんのウールのコートも、例にもれずざわざわしていた。佐原さんはもちろん毛玉の大将であった。

部屋はさっぱりと片付けられていた。女兒用のマフラーだけが忘れ物みたいにダイニングテーブルの椅子の背に掛けられている。その椅子の向かいに腰掛けて、私は用意されていた原稿を見ながら大きな模造紙に表や文字を書き写していった。

本人の目録情報によると、渡会さんは地域のアート活動を応援する団体に所属している。ふだんは、あまり知られていない若手クリエイターや各種文化サークルの作品・活動を紹介するフリーマガジンを発行しているらしい。この春、新たな試みとしてそういった人々によるワークショップ、作品展、演奏会などをまとめて開催する「地元の魅力再発見、強化月間」を設けるのだという。

「芸術の現場におけるダイレクトな人と人との出会いが目標なの。アートを通じた地域貢献ってすてきだと思わない？」

マンションに向う途中、彼女はそんなことを言った。佐原さんや私のような、憐れなほど美術を解するセンスのない者は、強化月間中、物陰にでも隠れていればいいのだろう。とにかくそのイベントカレンダーを代筆するのが今回の仕事だった。渡会さん所属のサークルは、メンバー代表者の営むカフェが事務所を兼ねていて、そこに大きく貼り出すらしい。

絵画サークルによる野外スケッチ会やバルーンアートの講習会のスケジュールを私が書いている間、渡会さんは台所で林檎りんごの皮をむいていた。「今日は娘が友達と遊びにいつてるから静かで……ああ、話しかけたら気が散るかな？」

全然大丈夫です、と言ったときには書き間違っていた。渡会さんはふたたび大きに笑った。私は恐縮して修正ペンをかたかた小さく振り、

「実際のところ、あの欄はセツに吹きこまれて埋めたんです」と言った。

渡会さんはイーダ会が結成した当時のメンバーだ。もともと自分と知り合いだったことから入会したのだと、セツから聞いた。

「セツちゃんらしいな。だけどいい字だよ。誰も読み間違わない」

彼女が言い、私はふと手をとめそうになった。この人は予備校で日々教壇に立ち、生徒たちに見えやすいように板書しているはずだ。たとえクセのある字でも小さすぎるはずはない。

ゆっくり顔が熱くなり、さっきまでより加速してサインペンを走らせた。こんなのは本物じゃなくて、力づくのやさしさで象かたどつただけの需要だ。でも口に出して何になるだろう、セツも渡会さんも当然そこは織り込み済みだったのだ。

作業が終わると渡会さんは手放しでよろこび、熱い紅茶と林檎とカステラをふるまってくれた。交通費は別として、報酬は発生しないのが原則だ。食卓の背後には天井まで届く白い書棚があった。画集や写真集の他、企業による文化活動支援云々といった、どう頑張っても興味の持てない書籍がたくさん並んでいた。

「黒井澄華作品集」

背表紙どおりに私が思わず呟くと、渡会さんは「自由に手にとって」と言った。私は棚の前に立ってその古そうな本をばらばらとめくった。佐原さんによる盗品は掲載されていない。渡会さんは隣にきてページを覗き込んだ。

「見たことある？ 石崎美術館で。いいよね、力強くてしなやかで。『必ずしもその形でなくてもいいんだけど、たまたま今この瞬間はその形を完璧にとっている』って感じがする」

渡会さんはエレベーターまで送ってくれた。周囲に高層の建物はほとんどない。風が荒々しく吹きつけていた。地上十階の長い廊下から見下るす眺めは、枠が外れたようにひらけていた。さまざまな幅の道路が整然と交差を繰り返し、家々は地表にびっしり並び、一軒単位ではなく区画単位で視界を構成する。立体的であると同時に平面的で、街と地図と

の中間みたいに見えた。

渡会さんの家にいる間の私もまた、いつもの自分とあのプロフィール欄の自分との中間みただった、そう思った。

やりとりの模様を報告するため佐原さん宅でセツと会う約束だった。半端に時間が空いているので、バスを乗り過ごし、橋のたもとの停留所で降りた。私の他には誰も降りなかった。山並みを黒く映してきらきら流れる遠い水面を、欄干に寄り掛かって眺めた。堤を歩き出してしばらくすると、川原に見慣れた人影があった。

独り立ちした愛弟子を誇らしく見遣る親方のような佇まいで、室木は対岸の煙突を見ていた。細長いひとだから細長い煙突たちに親しみを覚えるのだろうか。彼は小さな花を踏まないようそつと草地を歩き出した。まだ春の野とはいえないが、色褪せていた芝生は瑞々しさを取り戻しつつある。後ろ手を組んで歩く室木はそのことを、芝生並みに喜んでいるように見えた。

「室木さん」

土手と川原を繋ぐ階段がある場所まで待たず、私は一步一步踏ん張りながら斜面を下りていった。そしてすべて転んだ。転び方を披露するために名前を呼んだようなものだ。彼は駆けつけて「平気？」と手を差し出してくれた。掴んだのは、きっちりした硬さの冷たい掌だった。

車座を取り仕切る役目もなくピラも持っていない室木は、私を前にするとにわかには手持ち無沙汰になつたらしい。「怪我がなくてよかった」と、話の接ぎ穂がなくなるのを惜しむようにゆつくりと言った。今日は時間の迫っているバイトもないのだろう。私たちは蛇行する川に沿って歩いた。長さに余裕のある彼の足取りは大らかなスピードをうみだしていく。

私は渡会さんとの仕事を終えてきたばかりであることを告げた。表情をきつくすることもなく、「そう。おつかれさま」と彼は言った。それから、今回のように素性のわかつている場合ならまだしも、サイト上で

しか交流のなかった人との間では対面が必要な取引をすべきじゃないと思う、と言った。私は同意してから言った。

「顔も名前さえも知らない、『準会員』みたいな人があんなにいたなんて、知りませんでした」

「サイトのブログのとこ見たことなかった？」

「はい。あ、室木さんによるあれは読んだんですよ？　イーダ会を結成するときの状況」

横顔の彼は「うれしいね」と屈託なく言いながら、肩にかけた木綿のかばんを開けてスマートフォンを取り出し、軽く操作してこちらへ寄越した。

「今もつながってる人たちって、この時期からコメント返してくれてたケースが多いんだよ。刺青いれずみは入れてないと思うけどね」

そのブログには二年前の日付が表示されていた。イーダ会が結成されて半年近く経つ頃だ。

『今日はN町の手作り市で、とうとう初めての、手作りパンの販売をしてきました！』

当方は売り子をしました。素材にこだわり「自然にも体にも優しい」という商品のコンセプトを体现すべく、せいじっぱい大らかそうに立ってました。このサイトを見て来てくださった方もおられて大感謝です。こんな紙袋も用意してみました。「Tda」のロゴは消しゴムはんこです。なぜか手先の器用なメンバーが多いイーダ会。これは私たちのブースのそばにたくさん植わっていた破れ芭蕉です。いかした借景でした。

おかげさまでパンはほとんど売れて一安心。もし大量に残ってしまったら、たとえ我々が隠蔽しても、目を光らせた代表が掘り当て、むさぼり食ったりしそうだからです。「自分」の域を計り間違っているがゆえに「もつたいたい」という状態を対象化できないのなら、粗末にされたものと自分を切り離して認識できないのなら、粗末にしないという行為しか選べないわけです。しかしいくら自然にも体にも優しくても、食

べすぎたら死にます。そんなことより販売の手伝いをしてほしい。

というわけで「今日の代表」はこの一枚。半分に切り分け、スプーンでくりぬいて食べ終わったキウイの皮を持つ代表の手、なんです。ペラペラの果皮一枚に。キウイの最果てでした。』

『家が近かったら買いに行けるのに、残念です。』

『yuzu さんお久しぶりです！ 県下にはありませんが今後も各種イベントで出店させていただく予定です。その都度サイトでお知らせしますので、近くに来られる折はどうぞお立ち寄りくださいね』

『代表くんばんは。私の中には、私の存在を否定しようとするすさまじいエネルギーがひそんでいます。イーダ会に入ったらやつと、それをかわすことができるのでしょうか。だけど一方では、自分に向いていること、自分にしかできないことが、どこかにはあるはずだという思いを棄て切れません。』

『代表くんばんは。僕はどうしても嘘をつくことができません。嘘をつくのは悪いことですよ？ 客観的に見てこれほど何不自由なく生きている自分には、もうどんなちよっとした余白もないように思うんです。余白というのはつまり、間違ったことです。間違ったことをしても「仕方ない」と許される範囲、といった方がいいかもしれません。ひどい環境で生きていけば、そうと知らず間違ったことをしてしまうのは仕方ありません。あるいは間違ったことだと頭ではわかかっていてもやむを得ずすることだってあるでしょう。でも僕は違う。僕と悪との間には、奇妙なほど余裕というものが残されていない。』

わかりやすい悪に手を染めないことは、僕にとっても僕の周囲の人にとっても有益なことでしょう。しかし嘘をつけないことは、ときに相手を傷つけます。でもどうしても嘘をつけないのです。そして何より許せないのは、他人は僕に嘘をつくということです。』

「このブログ書いたのって」

「セツだよ」

予期した通りの答えが返ってきたのに、私は少しぼんやりした。室木は言った。

『代表くんばんは』っていうのは、一種の合言葉なんだ。いつからかそういうふうになった。管理者との応答を一足飛びにして、ダイレクトに代表に向ってだけ訴えられる声」

「佐原さんが読むとは思えないけど」

「読んでるよ。今も。まああれが唯一の代表としての仕事というか」

「うそ」

「疑うのも無理ないけどほんとなんだ。『読んでください』って渡すと嫌がるくせに、『校正お願いします』って渡すとひったくって、すごい眼力で目を通す。赤鉛筆の記号とかが入ったのを突き返される」

「そう説明してみたところで、彼らは信じるんですか」

「そもそも説明してない。校正中の動画を流すのもいやらしいし、こちらからは一度その事実を伝えただけで、特に何も証明してない。彼らはただ賭けてるんだよね。賭けるという行為を必要としているのかもしれない」

室木は、ふだんより浅いがふだんより入り組んだ形に微笑んだ。

一体誰がどこまで「織り込み済み」で会の存続をやりくりしているのか、あるいは織り込まれてしまっているのか、私にはわからなかった。

「彼女は、この次の年にはブログの管理者をやめてサイト全体の面倒を見るようになって。ブログは今では他のメンバーが交代で書いてる。けどやっぱり最初の、セツのやり方を踏襲してるね。代表の動向みたいなのを紹介する文とか写真が入ってる」

「初期イーダ会の頃はまだセツと佐原さんがつきあってたんですね」

私が言うと室木は静かになった。彼が、愕然^{がくぜん}とした自分をガタゴトと立て直す音が聞こえそうだった。

「知ってたんだね。まあ、そうなんだ」

「で、別れたからもう書くのはやめたんですね」

室木は「たぶんそうだろう」と言い、励ましになると思ったのか、木

綿かばんからフルーツのど飴のバックを出して好きな味を取らせてくれた。私がパイナップル味のを選ぶと、彼は少し笑って言った。

「会の規模からすれば少なくない『準会員』を擁することができたのは、セツのおかげなんだ。それは認めないといけない。イーダ会を知らない人がいきなりうちを検索してくれるわけがないよね？ そのきっかけを作るためにセツは、すごく熱心にブログの読者を増やそうとしてた。脈がありそうな人とか団体のネット上の記事を探して読み漁って、自分の痕跡を残して、向うからこちらを訪れてもらえたり情報を広めてもらえたりし得る状況を作って。僕のビラ配りだけでは所詮地域性の制約がかかったままで」

私は困って、澄んだ黄色の球体を口の中でさまよわせていた。今日の彼は、気の向いた誰かにすつと殺されてしまいそうに無防備だった。

「彼女にはたしかに、どう言えはいいかな、先の尖った矢印みたいなところがあるよね。今回の『目録化』にしても。僕も、頭ではわかっているんだよ。セツが言うことももつともだって」

「そういうえば、室木さんがどうして反対するのかっていう理由そのものは、きいたことがなかったような」

「なんとなく嫌としか、言いようがない。メンバーの総意としても、頭では理解してても漠然とそう思ってるんじゃないかと僕は思う。彼女が指し示す方向に反対してるわけじゃなくて、目指す方向は同じなんだけど、そこまで焦点を絞り込んで進んでしまいたいわけじゃないというか。僕はただ、自然に存在するというのをしたいただけなんだ。思いを同じくする人たちと。でも矢印に匹敵できるのは矢印だけだ」

少なくとも今このときは、あなたはごく自然に存在しているように見える。私はためらわずにそう告げるべきだったのかもしれない。彼はそれきり口を閉ざしていた。横顔を見上げると、何かを祝っている人の表情だ。土手の梅の木が満開だった。私の耳には聞こえないというだけで、室木のそのときの沈黙は、梅に対することばだったのかもしれない。そう思わせる抑揚があった。彼の実家はこのあたりでは名の通った和菓子

屋だ。すでに長男が跡を継いでいる。就職活動に敗れつづけた。わけのわからない人を代表の座に就かせた。硬くてひんやりした掌。

もちろんそんなことではなく、目録の彼のリストには、文句のつけようのない学歴や瀟洒しょうしゃな資格の数々が並んでいたはずだが、具体的には覚えていない。今思い出したのは一つの欠落だ。彼自身がイーダ会の「設立の動機」に記していた、「ただいるだけで、この世界は、何度でも何度でも美しい瞬間を経験させてくれる」は、あのリストのどの欄にも含まれていなかった。

鍵はあいていた。だが誰もいない。最近、佐原さんは自分が外出するときすら施錠しなくなった。泥棒の端くれなら自分も泥棒に用心すべきではないだろうか？ 会員の利用が自由になったのは、セツの赤いノートパソコンと同じだ。彼にはもう彼だけの家はない。

長いあいだ無人だったらしく部屋は冷え切っていた。私はストーブを点け、セツのパソコンを起動させた。それからセツの手による時期の、イーダ会や佐原さんや彼女自身についての記録と、それに対するコメントと、代表へのダイレクトな投稿とを、次々に読んだ。

『今日は私たちが有機栽培で野菜を育てている農園にみんなで行きました。説得して代表も連れて行きました。宿命的な車酔いを標榜する代表のために、電車です。』

で、「今日の代表」ですが、ホームで友人らとふざけていて線路の方へ踏みはずした高校生に手を伸ばし、派手な瞬発力で引っ張って助けてました。これはそのとき、抱きかかえた高校生もろとも思い切りホームの側に倒れこんで代表が拵こしらえた、打ち身うちみ（部分）です。こういうことがあるから代表は外出を極力控えるようです。わかりやすい。

不快なことを我慢できない彼が救ったのは、見知らぬ高校生ではなく彼自身です。目に映る他人の血が流れることと自分の血が流れることを、代表は自動的に重ね合わせてしまう。これは「共感」とは異質なよ

うです。「共感」には、前提として「隔たり」がありますけど、彼の場合は癒着した状況しかない。調整できないし切り替えなんかない。

この人を見ていると、「個である彼」と「個を超えたものの一部である彼」との差が、軋むように現れてくるのです。以前も書きましたが私はかつて、たった一人で「自分以外」になろうとしていました。でも服や髪形をいくら変えても、母語以外の言語をいくら習得しても、自力では何も動かさなかったわけです。代表と会うまでは。

この人は世界との関係を築くのに失敗したままみつともなく混じり合っているだけだって、頭ではわかっても、魅入られてしまう。混じり合っているからこそ余裕のない切実さに、ふしぎに胸を打たれてしまった。私になりたかったのは「別の個」じゃなくて「個を超えたものの一部」だったんだということを、彼の存在は浮き彫りにしてくれました。とたんに、今までだって自分の周りにあった景色が、ふっと変質しました。」

『代表くんは。僕は、何に対しても実感を得られないことを隠しながら生きるのに疲れて、もう二年のあいだ大学を休学しています。周りの人たちが、共通のポイントで笑ったり怒ったりしてるのも、信じがたくて。みんながどこまで実感に基づいているのか、他人の心身の中に入りして計ってみたい。あるいはもう実感はいいから、自分を完璧に客観視してみたい。一度ぜんぶ均すべきだと思う。イーダ会に入ればできますか。僕の存在には様式がない。』

『ピクニックみたいですね、うらやましい！ どんな農園なのか気になります。ところで「周りにあった景色」がどんなふうに変質したのか、また教えていただけたら嬉しいですよ！』

『水玉さん、ありがとうございます。また機会を改めて書かせていただきますのでよろしくお願いしますー』

『更新が遅くなり、失礼いたしました。当方が就職したこともあり、しばらくばたばたしております。』

先日、自分の置かれた環境が代表との関わりを通して変質したということを書きましたが、そのつづきを少し。

短大を卒業して外国語学校に通っていたころから、今の会社でバイトをしていました。個人輸入代行業の手伝いです。日本ではちょっと見かけないデザインの子供服とか雑貨、あるいは大きいサイズの衣料品や国内より安く買えるブランド品などは、欲しくなる気持ちに共感できますよね。一方では、こんな誰が必要とするんだらうっていうマニアックすぎる商品があつて、それを注文する人がいて。だけど所詮見知らぬ人の代理をしてるだけっていう、ゼロの位置から動かない感覚だったし、殊更やりがいを意識したことはありませんでした。

でも代表を通してこの世を経験するようになってから、変わりました。ゼロの位置だけど、無じゃない。誰かの欲望が成就する一連の流れの中に、自分の、透명한位置をふいに踏みしめられるようになった。まるで、足が届かないと思いついで立ち泳ぎしていたのが、何かの拍子にタイルへ爪先がふれて、水中で着地したみたいに。その水底は私だけのものじゃなかった。誰もがここに立っていることが水底から伝わってきました。すると顔のない顧客の人たちが急に実体を持ち始めました。むしろ表面的に取り繕わないといけない家族とか友人より、見ず知らずだけど本当に欲しいものを打ち明けてくる人たちの方に、独特のリァリティを感じるようになったというか。自分自身にしか意識の向かなかった私は初めて、まわりを見渡そうとしました。

この転換がなければ、イーダ会でサイトの運営に携わりたいという発想にもならなかったと思います。代表のおかげでこうしてまったく新しいつながりの一部として機能できることに、感謝しています。

「今日の代表」は川にぎぶぎぶ入ってビニール袋や空き缶を拾う後姿に決定。道行く人にびっくりされていきました。というか私たちもびっくりしました。』

『代表の背中、ついていきたくありません』

『実際このあとメンバーも清掃に加わったのですが、我々はさすがにも

うちよつと冷静に、ゴム長とか長い柄のついた網とか用意してから取り掛かりました・・・水玉さんも河川でゴミ拾いなどされるときはくれぐれも慎重になさってくださいね』

『そうだったんですね！ セツさんがここの管理者をされてることも納得です！』

『扇さんありがとうございます。代表のおかげでもあり、皆さんのおかげでもあります！』

『セツさんご就職おめでとうございます。自分は、勤めていた会社が倒産して失業して以来、なかなか次の働き口を探す気力が出ず閉じこもりがちになってます。今度こそ自分に向いている仕事につきたいという気持ちと、それが何なのかわからず時間だけが過ぎて焦る気持ちとで、時々擦り切れてしまいそうになります。皆が皆あなたみたいに、しなければならぬこととしたいことがマッチするわけじゃありません。こは、イーダ会に入ってどんなに展望が開けたかを自慢する場所なのでしょう。自分ひとり一段高いところから見下ろすのは気分がいいでしょうね。それとも、誰でも入会すればあなたのように歯車がうまく噛み合うようになるかと、保障できますか？』

『teizouさん、ありがとうございます。』

残念ながら誰も何も保障なんてできません。そして私は一段高いところになどおりません。私の足は、水底が果てしなくフラットであることを知っています。私たちの理想の形態は集合体であり、それは水底を離れてはあり得ないのです。

ところで、集合体の最小単位って二人ですよね？ 私は時々こういうイメージを持ちます。一瞬でも、ある人と本当につながっているとき、私とその人をもし誰かが真つ二つに切り分けたら、「ある人」と「私」に戻るのではなく、半分サイズの「ある人と私」が二つできる。その二つは同一のものであってもう区別ができない……それはつながりであると同時に解放じゃないでしょうか。

その「ある人」に teizou さんもなっってくださいることを願っています

す。』

毎日ではなく不定期の更新とはいえ半年分近くに目を通し、いったん視線を片付けるように瞼を閉じた。

合言葉で始まるあまりにも一方通行の訴えよりも、コメントの温度のばらつきよりも、私の心といちばん摩擦を起こしたのは「代表」の写真だった。わかったからだ。撮影したときセツがどんなに佐原さんを好きでたまらなかったか。

ダウンジャケットを着込んだままだった。脱ぐと部屋はまだ寒くて、自分の両肘を抱く格好で卓袱台の周りを二度めぐり、脛すねをぶつけて自動的に再び座った。

セツには以前電話で、佐原さんとのかつての間柄について尋ねたことがある。私には少ししか語られなかった、セツが彼から受けた影響。ブログを書いていた頃の彼女は見ず知らずの人たちに向かって、ちよっとでも伝えようと前のめりにさえなっている。

でもここには重要な点が欠けている、と私は脛を押さえながらじっと思った。彼女はひとことも、代表の同棲相手である事実に触れていない。代表と「出会ってから」という表現は「恋に落ちてから」という特殊な状況を一般化したものだ。代表との関係において他のメンバーと等しくない人物が、会の紹介をしていることは、たしかに公表する価値がない。そして読む人たちはきつと、そこに恋愛感情が作用しているとは気づかないまま、彼女の記録が帯びている白熱をイーダ会の帯びているものとして受け取る。

スクロールして、画像だけ次々に目でたどっていく。今このパソコンが載っているのと同じ天板。今ここにはないやわらかな陽射し、見覚えのある手。薄茶色いキウイの果皮の向うに透ける、くつきりした指の影。文章で情報を制御している分、佐原さんの写真はセツの意識の破れ目みたいだ。そう見えるのは私がたまたま彼らの過去を知っているからにすぎない。

私は立って台所の窓をからからと開けた。食器棚から借りたマグカップ片手に、息を吹きかけながら白湯を飲んでみると、カーキ色のロングコートが商店街から角を曲がってくる。鉄骨階段が規則正しく鳴ってセツが到着した。

屈強な佇まいの大紙袋を提げた彼女は「今日はお疲れ様」とまず言った。スーツ姿か芸術家肌、どちらの彼女だろうと注目していたら、コートの下から現れたのはシトロンイエローのパーティードレスに真珠の首飾りだった。

「今度は一体どんな友達のお下がりなの」私は言った。

「知り合いの結婚式で。披露宴と二次会の間があいてたんだよ。今すぐイラッシュ。一瞬自分まで、家に帰ったら夫がいそうに錯覚する。で、どうだった？ そっちは」

この人と十も年が離れているのを実感するのはこういうときだった。セツは暖かそうな厚手のショールを肩に巻きつけ、引き出物の入った紙袋から平たい包みを取り出していた。

「この箱に高級焼菓子の入っている気配。私はおなかいっぱいだけど、亜季食べなよ。鉢ある？」

私は佐原さんの筆立てからカッターナイフを借りた。刃物を持ったままセツを見下ろすと、手ぶらで見ていたときの彼女よりも美しく思えた。私からそれを受け取ると、セツは薄い刃をすべらせはじめた。私は立ちままだ言った。

「この卓袱台で佐原さんと二人でキウイを食べたとき、光でキウイの皮が透けたときセツは、佐原さんの指にさわりたいとしか思ってたなかった。ちがう？」

「えっ何？ キウイ？」

つかのま手をとめたセツは何かを思い出しそうに表情を傾けたが、やがて「女子高生の間でしかわかんない隠語？」と笑った。

「佐原さんのことどれくらい好きだった？」

私は、我ながら幼稚な問いにしか言い換えられなかった。セツはもう

私が訊かなくていいようにはつきり言った。

「一つ確かなのは、彼ほど強烈に私をほしがった人は誰もいなかったし、私以外のどんな女の人も、彼から求められるのと同じ深さまでは彼を求めることができなかっただろうってこと」

「嫌な人だと何度も思ったって、前にセツ、言ってた」

「紛れもなく嫌な人でしょ？ 私のことだって、内面的な理解や交流は抜きで、あの頃の妙な外見とか苛々して不安定な気配とかを、わけもなく手元に置きたくなっただけだよ、彼は。思い遣ってくれるわけじゃない。でも彼と共鳴した。私自身が、事実としての自分っていうものの重さと、そのなかみの少なさととの差にずっとふりまわされてきたんだから」

「ちよつと待って。結局セツに直接影響したのは、大恋愛っていうコンディション？ それとも佐原さんの特殊な存在の仕方？」

「もしどちらか一方だけだったら、私はこんなに遠くまで運び去られてなかっただろうね」

彼女の答えを聞きながら、なぜか、小さな旗が頭の奥でひるがえ翻った。何色だったのかわからない。きつい色だった。セツが手渡してくれた、詰め合わせの中で最も愛らしい小鳥形のパイに口をつけず、私は尋ねた。

「好きだから、佐原さんのことを広めたかったの？ 不特定多数の人に」

セツは、弾力のある沈黙を先に寄越して言った。

「ああ、君はそれが訊きたかったのか」

風で間仕切りの扉が閉まる、ばたんという大きな音がアパートのどこから届いた。

「まあね。でも順序が違うな。何かを広めたいってのがまずあって、だから発信するものが必要で、だけど他人が知りたがる有益な情報なんか私の中にはなくて、そのときの私の内を占めていたのはあの人だった。そういう経路。亜季はイーダ会のサイト、あんまり見てないんだと思ってた。室木さんから聞いたの？」

私がうなずくとセツはめずらしく懐かしむような声音で言った。

「同棲し始めた次の月だったかな、室木さんが最高級に不機嫌なあの人の後ろにくっついてきたのって。挨拶もなしで、玄関先で私の刺青を見て『やはり』とか叫んで、目立つほど地味な服といい、大変そうな人だと思った。私の腕を見たってだけであの人の不機嫌はほぼ殺意にまで達してたけど、全然気づかない室木さんは弟子入りを願ひ出てね」

「もちろん追い払われたわけでしょう？」

「何度もね。でも室木さんは毎日通ってきた。私は、むしろ私と組まないかって言ったの」

「なんでまた」

「あの頃はコミュニティの目録化なんて思い描いてもいなかったけど、個人であることの質を今までより融通のきくものにする、そういうつながりについて漠然と考え始めてはいた。そのためには大勢の共感する他人が必要だっていうことも。室木さんは、あの人を前にして私と同じような反応をしてたし、話が早そうだと思って」

誰かが表の階段を上がってくる。セツはドアの方へ顔を向けた。鍵を開ける音は二つ隣の部屋から聞こえた。彼女は玄関を見たまま言った。

「室木さんはとにかく突破口が欲しかったんだと思う。室木さんにとってあの人は、私にとってほど根源的な存在じゃない。実際、ビジョンを打ち出すのも向うの方が早かったしね」

「村？」

「の前に、パン屋。彼にはすでに少くない同士がいて、なかには世捨て人もいればパン屋で修業中の人も、実家が農家の人もいたからね。最初は、ボランティア活動をしながら志を同じくする者たちで共同生活を営もう、有機栽培の原料で作った手作りパンを販売車で売って資金としよう、という手合いの集まりだったの。だんだん村づくりにまで理想が伸びていっちゃったわけ」

「けど今もそのへんの流れ、結構引きずってるよね」

「わざわざ中止することはないものね。ある人が始めたことはその人の

意図を超えて存在し続けるし。どんな実を結ぶか最後までわからない過去の種が自分の内でひしめいてる。だからこそ、意味もなく死なずにいる自分に対して、イージーな判決を下さずに済む、それと同じ。亜季、そうだよね？」

彼女は口紅なしの淡い唇に微笑を走らせた。さっきまで商店街のアーケードの上でも飛行していたような、翳りのない微笑だ。私はあやふやに相槌を打ち、それからもう一回克明にうなずいた。

「で、会員を増やすためにもホームページを開設しようとなったときに、やっと私も少しづつ、自分のやりたいこととイーダ会とを重ね始められたわけ」

セツは腕時計を確認した。いつもの安物とちがい凝った細工の、壊れそうに華奢きゃしゃな時計だ。時間がなかった。渡会さんのやりとりについて話すべきなのはわかっていた。

「セツはさ、佐原さんによって独占されたから、溶け合った視点で『代表を通してこの世を経験』できたんじゃないの？ だけど佐原さんはイーダ会を、セツを求めるように求めることはない」

かつてこの人に「保障できるのか」と囁みついた、名前も顔も知らない人は、今どこで何をしているんだろう。

「考えすぎだよ。別に騙だまそうとして伏せてたわけじゃない。図式をシンプルにしただけ」セツは言った。

「騙したなんて言っていない。私はただ、恋愛抜きには成り立たなかった状況が、恋愛なんか度外視した感じで再現されてるのが、不安だった」

「今さらどうしようもないでしょう。もう実際にはないんだし、あのときの変な二人の間にあった感情はどこにも」

「別れるときイーダ会を抜けることは考えなかったの」

「彼が私を追い出したあとも、彼と本気で共鳴したあの響きだけはやまなかったんだもの。今もやんでない」

その音を佐原さんはやむを得ず近くでずっと聞いてきたのだろう、と私は思った。先に失恋したのは絶対に佐原さんだ。自分と関わることで

セツがクリアな人物になっていくのを、彼はとめられなかった。

セツは私がひらいたままにしていたノートパソコンの画面を一瞥いちべつして言った。

「君は、あの人はイーダ会を必要としないって言うけどこれから先もそうかな？ ……まあいいや、亜季、私はそんなことより、」

そのとき急にドアが開いた。今度のセツは階段の音を察知していなかったらしく、鮮度のある速さで玄関を見た。佐原さんが上着もなくゴミ袋片手に帰ってきた。私も足音は聞こえていなかったが、「そんなことより」と言われた戸惑いで、驚きは半分濁っていた。

彼はストーブへ直進してどすんと座り込んだ。「ちよつと電話」と言ってセツは入れ代りに出て行った。階下の部屋のどこかから、女同士の大きな諍いさかいの声がしていた。とても似ていて、親子のようにも姉妹のようにも、一人芝居のようにも聞こえる。

「どこ行ってたの？」私は言った。

「知るか。しかし思い切り遠かった」

きれぎれの話繋ぎあわすと、どうやら佐原さんは、ちよつとアパートの前を掃き掃除するだけのつもりが、となりの家の前の吸殻を拾い、その斜向かいの集合住宅わきに落ちていた洗濯物の持ち主を訪ね回り、とこじんまりした善行を積み重ねながら、何かの罫はしに落ちるようになり、町内から誘い出されてしまい、寒さと疲労が彼にのしかかり、足はもつれ、頬はこけたらしいのだ。

「きりがない」

二つ折りの座布団を枕に、こちらへ背を向けて寝そべった佐原さんは、一つ一つが妙に離れた不気味な発音で言った。彼はわがままだから校正に歯止めなんかかけない。そして誤字脱字の「きりのなさ」にそのまま消耗される。その一方で、些細なことでも我慢がきかないのに階下からの不穏な口論やテレビの大音量には無反応な、固有の傾向を持つ一人として彼はここに居る。時々、彼が二人いるように思える。黒いセーター越しに淡く浮かび上がる佐原さんの背骨。私は見るともなく見ていた。

セツが戻ってきてても佐原さんは寝たふりをつづけた。彼女はショールを畳んで毛玉のついていないコートに袖を通した。

「そろそろ行くね。亜季、渡会さんが今日のことでもコメントくれてたよ。満足のいく出来だったって。亜季はどうだった？」

棒読みのように私は言った。

「これ以上ないくらい丁寧に書いた。でも、本物の必要性があったわけじゃないよね」

渡会さんは予備校の講師で、私は高校生だ。

「多少ちぐはぐだろうが、とにかくスタートして事実になっちゃうことが重要なんだよ。最初から最後までずっと違和感あった？」

セツは尋ねた。

「基本的に字を書くの好きだからすぐうやむやになった」

「じゃあ、よしとしてよ。君はもっと、君の中の本当を使うべきだし、彼女は使わせてくれた。なおかつ彼女の依頼はでっちあげじゃない。もし君が書かなければ彼女が書かないといけないものだった」

「でも私が誰なのかよくわかんなかったような」

「イーダの一部だったんだよ」

こともなげにセツは言い、寝返りを打った佐原さんが少しぼかんとした顔で私を見上げた。

「今日、何をしてきたって？」

私が説明し終わらないうちに彼は上体を起こし、セツに訊いた。

「なんでこいつを巻き込んだんだ」

「今頃？」彼女は失笑した。「すっかりしてよ代表」

「入会はしないって、こいつが自分で言ってただろうが。どうしてそう不正確なことをするんだよ」

ふしぎに静かな彼の声には私は耳を澄ませていた。イーダ会の集まりへ最初に顔を出したとき私が喋ったことを、佐原さんはたしかに聞いていたのだ。文机の前で正座し、鉛筆削りのハンドルを高速で回しながらも。

「君の唱える正確不正確はあまりにも表層的なんだよ」

セツは落ち着き払っていた。二人が口をきくところに居合わせたのはじめてなのに、そんな気がしない。佐原さんがこちらを振り返った。

「やめておけ」

彼は偏りのない声で言った。

「それは亜季が決めることでしょ」

身支度を終えたセツが玄関のドアを開けながら言った。

仄暗い部屋を、夕方の光が通って琥珀色に磨きぬいていた。

「私のリストは目録から外してもらおうよ。佐原さんが言うなら」

私をやつとのことと言うと、用のなくなつた佐原さんは私から目をそらした。真珠つきのセツは少し眉を上げて、笑つてはいないが面白がるようなまなざしを私に向けた。

大きな、彫りの深い雲が空のあちこちで静止していた。階段を下りていくセツを思わず追いかけて「つきあつてること、ばれた？ 今」と背中に声をかけた。彼女は足をとめないまま振り仰いだ。

「むしろ、君たちまだ別れてなかったのか、と思つて」

鉄骨を鳴らす彼女のハイヒールは、爪先が冴えざえと尖っていた。矢印、と室木は言った。私は渡会さんの家で黒井澄華の作品集を見たことを思い出した。

——必ずしもその形でなくてもいいんだけど、たまたま今この瞬間はその形を完璧にとっている。

私にはあの評は、佐原さんの盗品よりもセツにふさわしい気がした。

〈続く〉

牧田真有子(まきた・まゆこ)

80年生。「椅子」で「文學界」新人賞奨励賞を受けデビュー。人が抱く寄る辺なさと、世界が孕む不確かさを、丁寧にすくいあげ描きとる。主な作品に「夏草無言電話」(「群像」09年5月号)、「予言残像」(「群像」10年6月号)、「今どこ?」(「WB」20号)、「合図」(「早稲田文学記録増刊 震災とフィクションの『距離』」)など。

早稲田文学・オン・ウェブ

copyright by Makita Mayuko 2013

published by wasedabungaku 2013